

# 歴史が眠る芸州廿日市史跡建造物群

(35・36・37・38・39頁におよその位置情報あり)

1	<a href="#">佐方八幡神社</a>	12	<a href="#">津和野藩御船屋敷旧趾碑</a>	23	<a href="#">蓮教寺</a>
2	<a href="#">洞雲寺</a>	13	<a href="#">稻生社</a>	24	<a href="#">常国寺</a>
3	<a href="#">岩戸尾城址</a>	14	<a href="#">東の火番所跡</a>	25	<a href="#">光明寺</a>
4	<a href="#">嶽尾城址</a>	15	<a href="#">芸藩紙蔵跡</a>	26	<a href="#">高札場跡</a>
5	<a href="#">西国街道壱里塚跡石碑</a>	16	<a href="#">明治天皇御休憩所跡</a>	27	<a href="#">西念寺跡(胡蝶園)</a>
6	<a href="#">街道松</a>	17	<a href="#">名物大新の桶ずし跡</a>	28	<a href="#">常念寺</a>
7	<a href="#">妙見社</a>	18	<a href="#">正蓮寺</a>	29	<a href="#">潮音寺</a>
8	<a href="#">桂公園(桜尾城址)</a>	19	<a href="#">正覚院</a>	30	<a href="#">住吉大明神</a>
9	<a href="#">桜尾城址桂公園石碑</a>	20	<a href="#">天満宮</a>	31	<a href="#">口屋番所跡</a>
10	<a href="#">桜尾城址碑</a>	21	<a href="#">廿日市本陣跡</a>	32	<a href="#">西の火番所跡</a>
11	<a href="#">桜尾土地埋立記念碑</a>	22	<a href="#">佐伯郡役所跡</a>	33	<a href="#">福佐売神社</a>

廿日市史跡建造物群へ[戻る](#)。



## 1 佐方八幡神社 廿日市市佐方

巖島神社と同時期の鎮座

農耕の神で佐方の氏神である木造神像、薬師如来坐像が祀られている。巖島神社神主家、桜尾城主であった藤原氏が崇拝していた。文政8年(1825)完成の廣島藩領内の地理や歴史を記した「芸藩通志」によれば、400有余年前に毛利家より神殿の寄進があつた。拝殿には三十六歌仙額が奉納されている。

以前は佐方だけでなく廿日市東町の人も氏子であつたが、廿日市天満宮が廿日市の氏神として祀られるようになり、佐方の氏子により守られてきた。桜尾城址西側の地にあつた石州津和野藩御船屋敷に生まれた、蝦夷地海路測定に初めて成功した「堀田仁助」寄進の一对の石燈籠がある。

廿日市史跡建造物群へ[戻る](#)



## 2 洞雲寺 廿日市市佐方 1071 番地の 1

曹洞宗応龍山 長亨元年(1487) 僧金岡用兼禪師開祖 本尊釈迦如来坐像

桜尾城主で佐西郡の神領を支配した巖島神社の神主であった藤原教親・宗親父子により藤原氏の菩提寺として創建。  
境内には藤原興藤墓、毛利元清夫妻墓、桂元澄墓、陶全妾首塚がある。



### 3 岩戸尾城址

廿日市市佐方本町

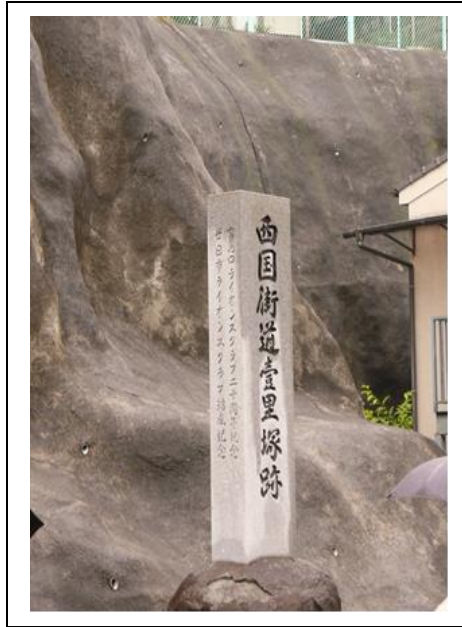
佐方本町の山陽女学園の地には中世のころ岩戸尾城があった。ところが山陽女学園の開園で城跡は消滅した。

岩戸山は当時海に面しており要害の地で、陶晴賢の父興房が約1年間在陣しており相当の施設があったものとみられる。



#### 4 嶽尾城址 廿日市市城内

JR 山陽本線廿日市駅東方の広電宮島線に挟まれた竹尾山にあった。北西側は切り崩され、南東側は畑地利用のため削平されている。



## 5 佐方 西国街道壹里塚跡

廿日市市佐方本町

岩戸山の崖下を進むと、五日市村と廿日市村との村境である。村境の五、六十米西が一里山である。「此一里山は広島船場より三里周防尾瀬川境より六里前後

三十六丁」とある。**道をはさんで二基の基段**があり、その上に木が植えてあるのが明確に描いてある。(上段図 赤枠2ヶ所内)。

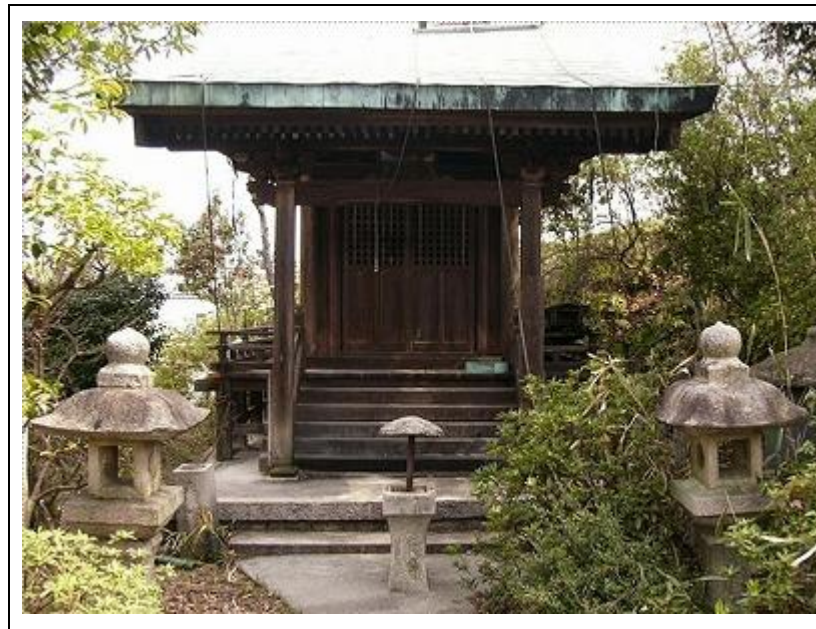
寛文年間(1661~72)の廿日市町屋図には道の北側に岩上の松が一本描いてある。南側には岩か山の意味の描画があり「石戸」とある。昭和十年代頃まで北側には岩層の大きな露出があった。松は、針葉樹としては温度の適性が広く、亜熱帯や熱帯に分布する種でも摂氏-10度程度の低温・組織の凍結には堪えて生存するということから、街道**松**としたのではないかと推測。

廿日市史跡建造物群へ[戻る](#)



## 6 街道松 桜尾本町

江戸時代、京都から江戸に都が移り、江戸を中心とした五街道（東海道・中仙道・日光街道・奥州街道・甲州街道）に次ぐ脇街道として寛永10年（1633年）参勤交代制度の確立とともに西国大名、長崎奉行、幕府の要人の往来する旧山陽道として、整備された。広島藩は旧山陽道を西国街道と称した。街道の整備は、宿駅(宿場)を設置、道幅2間半(4.5間)とし、1里(4<sup>1</sup>/<sub>2</sub>里)ごとに街道の両側に土を盛り、榎木などを植えて、距離を示す目印とした1里塚を設けた。廿日市では、1里ごとに1里塚松があり、街道の両側に3間(5<sup>1</sup>/<sub>2</sub>間)ごとに街道松が68本植えられていた(文政2年(1819))が、現在では1本だけが残っている。北側に位置する街道松は日をさえぎらないので用無しとしたとかしないとかで道路拡張等により、唯一現存の廿日市市大東の街道松も南側にある。



## 7 妙見社 廿日市市桜尾本町

古代中国の思想では、北極星（北辰とも言う）は天帝（天皇大帝）と見なされた。これに仏教思想が入り「菩薩」の名が付けられ、妙見菩薩と称するようになった。妙見菩薩は、北極星（北辰とも言う）を神格化した姿とされ、北辰菩薩とも呼ばれる。国土を守り、災いを除き、人の福寿を増すとされる。「菩薩」とは、「悟り（真理）を求める者」の意であり、「妙見」とは「優れた視力」の意である。

大内氏の氏神である氷上山興隆寺妙見社（山口市）を分祀したとされる。

左図：<http://www.ensenji.or.jp/contents/facility/bosatsu/> 『妙見信仰をめぐる』妙見シリーズ8 10頁より引用。





## 8 桂公園（桜尾城址） 廿日市市桜尾本町

文治元年(1185年)壇ノ浦の合戦で平家が滅亡したことは、歴史上大きな変革となり、神主 佐伯氏の勢力も衰退し、厳島神社は承元元年(1207年)に続き、貞応二年(1223年)二度目の火災後は、12年もの間神社の再建ができなかった。そこで鎌倉幕府の御家人で周防の守護職であった藤原親実に神主職を譲り、親実は神主職(承久三年(1221年))と安芸国守護職(文暦二年(1235年))を兼ね、厳島神社は再建することができた。親実はその後、周防の守護職に帰り、武田氏が決し、大内義隆により亡びる(藤原神主家の滅亡まで、三百十年ばかり厳島神社の神主としてまたその神領地の支配のため、その本拠を桜尾城に置いていた。

桜尾城番桂元澄の末裔で明治の大日本帝国歴代総理大臣を三期(11・13・15代)務めた桂太郎が旧趾の荒廃を惜しみ、全山を買収し廿日市に寄贈し、今に中世の歴史が眠る? 地として永遠に記憶され続けるであろう。桜の名所として知られる。

廿日市史跡建造物群へ[戻る](#)



## 9 桂公園 桜尾城址

廿日市市桜尾本町

廿日市にはかつて「尾」という名のつく七つの山城があった。

『芸藩通志』には、古戦場跡・折敷畑（宮内）から東に向かって続く七つの尾根にあった七つの丘に「桜尾、宗高尾、谷宗尾、藤掛尾、越峠尾、岩戸尾、篠尾」の山城があったとされる。この桜尾城址（現桂公園）は、七つの山城の本城とされ、築城当時は三方を海に囲まれた要害で、江戸時代までは、城跡はほとんど手付かずの状態でしたが、近代になると埋立・造成などの開発により山が削られ、遺構は全くなくなりました。

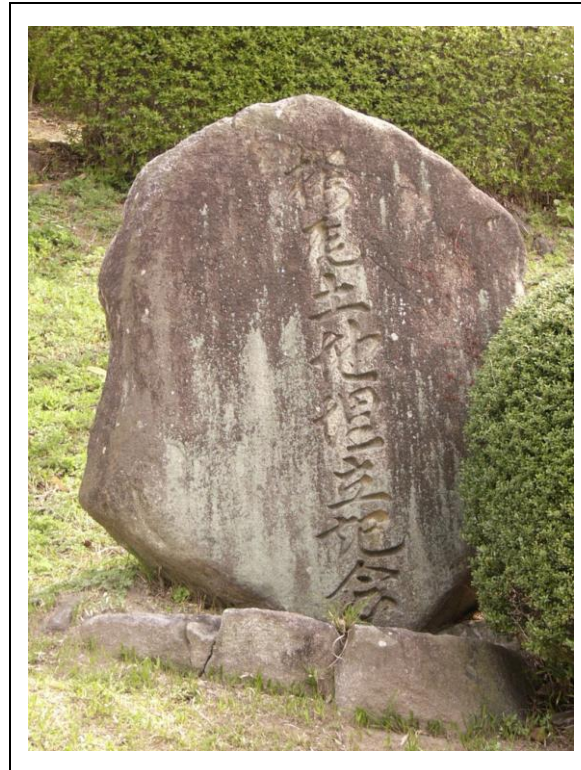
毛利元就と陶晴賢の厳島合戦(1555年)に破れ、自害した陶晴賢の首実検もこの桜尾城で行われ、洞雲寺の葬られた。

廿日市市で最も古い公園で大正2（1914）年に開園。桜尾城主である桂元澄の子孫、桂太郎公爵が桜尾城址を永久保存するため、当時の廿日市町に寄贈したことから桂公園と名づけられた。（上図は「芸州厳島御一戦之図 桜尾城部分拡大」）



## 10 桜尾城址碑 廿日市市桜尾本町

桜尾城は本丸、数段の廓があり、城の北、東、南面は海に臨み天然の要害であった。鎌倉時代厳島神主家藤原氏が入り、天文10年（1541）まで320年間居城、厳島神領を支配。その間神領を巡る武田氏や神主職の跡目争いがあり、大永3年（1523）4月11日友田興藤が挙兵、自ら神主と称した。同年8月1日大内義興・義隆父子の反撃が開始される。翌大永4年（1524）5月戦況は一変。大内親子は厳島の勝山に本陣を置き、陶興房（隆房（晴賢）の父）は岩戸山に、吉見・杉・内藤らは天神山篠尾に陣を置いて桜尾城を包囲し、弘中武長の警護船が海上を封鎖した。完全に孤立した桜尾城の攻防戦は7月から10月の講和が成立するまで続いた。天文10年（1541）1月12日友田興藤再び挙兵。同年3月9日、19日藤掛で大内方と興藤方は交戦。大内義隆3月18日岩国から大野の門山に本陣を移し、23日にはさらに七尾に進んで桜尾城を包囲する作戦にでた。今回の情勢が不利と判断した興藤の従属の神領衆・羽仁、野坂、熊野氏らは興藤を見限り、4月5日夜半、桜尾城を抜け出した。我一人と気付いたがすでに遅し。興藤はこれまでと城に火を放ち切腹。天文10年（1541）4月6日大内義隆は神主友田興藤を亡ぼした。承久3年（1221）以来厳島社神領、佐西郡を支配してきた藤原神主家はついに滅亡。



## 11 桜尾土地埋立記念碑 廿日市市桜尾本町

桂公園の西側斜面の道路沿いに昭和11年2月11日に建立された桜尾土地埋立記念の石碑がある。

かつての桜尾山は海に面しており、それより南側は海であった。幕末に桜尾新開が築造されたが明治期には台風等で何度も堤防が決壊して、大正15年に岩戸山の土砂で埋め立てて住宅地ができた。岩戸山の土砂を取った跡地に昭和3年（1928）山陽女学園ができたのである。



## 12 石州津和野藩御船屋敷旧趾

廿日市市桜尾本町

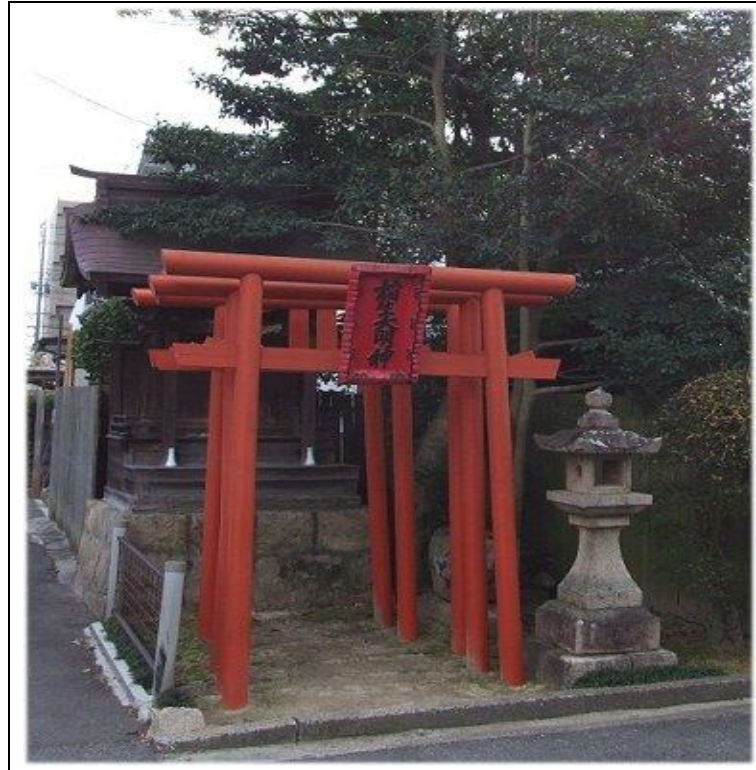
元和六年（1620）石州津和野藩亀井家（4万3千石）は、廿日市に「船着ノ蔵屋敷」を置いた。この時代はまだ参勤交代などに利用できるような宿泊施設はなく、廿日市商人 鳥屋七郎右衛門宅へ宿泊していた。しかしなにかと不便につき、廿日市内へ宿泊施設を望んだ津和野藩は、御往来御本陣鳥屋市右衛門・廿日市庄屋山田治右衛門兩人を仲介にして広島藩へ用地の提供を願い出、廿日市船屋敷地が、寛永八年（1631）五月十八日、次の通り許可・受け渡された。

参勤交代など上方との往来には日本海ではなく、陸路津和野を発ち、津和野街道を南下し、藩御船六日市本陣、大原本陣、廿日市の船屋敷に止宿した。この船屋敷がいわば下屋敷でここを中継して瀬戸内海を海路兵庫県室津まで参勤交代や特産の石州和紙など物資の輸送で往来していた。

船屋敷は桜尾城址の西側にあり、屋敷の南側には船の出入りができ、物資の積み込みを行っていた。停泊時の船は御船入のある城址の東側の港に係留されていた。

津和野藩亀井氏は寛永7年(1630)廿日市桜尾山西側の地に船屋敷を設け、参勤交代等の上方との往来には廿日市を経て海路を往来した。

廿日市史跡建造物群へ[戻る](#)



### 13 稲生社 廿日市市桜尾本町

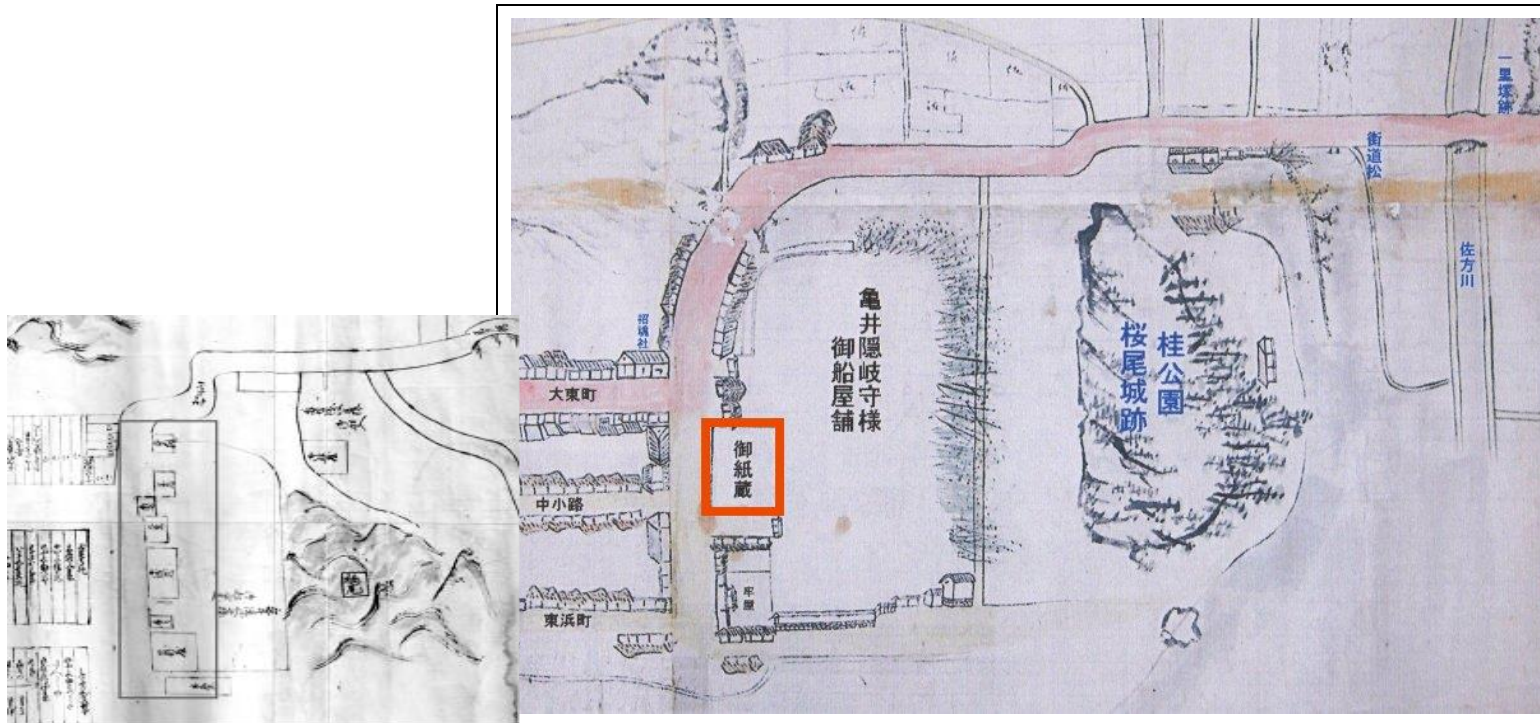
稲生社(漢字一字注意・一般的な稲荷ではない)は津和野藩御船屋敷に祀られていた。津和野の太鼓谷稲成神社(注:太鼓の支ではなく皮)の分神を祀る。石灯籠には寛政3年(1791)の寄進とある。

廿日市史跡建造物群へ[戻る](#)

画像なし

## 14 東の火番所跡 廿日市市桜尾本町

江戸時代にあり。



## 15 芸藩紙蔵跡 廿日市市桜尾本町

亀井藩、ココ廿日市ノ一画ヲ芸藩ニ借り、御船屋敷ヲ構へ、以ツテ上方往来ノ要津トセリ。

コノ一画ハ、東桜尾山側四十間、北側五十三間、西本陣側五十三間、南浜側五十四間内ニハ御館長屋紙倉アリ。(石碑)

「蔵屋敷」を西に向って北角から順次見てゆくと、九右衛門時そして「門」(一ノ門カ)次が宗右衛門で次が梢、突出て「番屋」で次が九右衛門で宗右衛門と九右衛門が「番屋」に双方から接している。その隣は横に長い「御紙蔵」そして又「門」(二ノ門カ)であるが、その次が吉三で、以上の住居は長屋でも「御扶持人」と廿日市では呼んでいた



廿日市史跡建造物群へ[戻る](#)



あんざいしょあと  
**16 明治天皇行在所跡** 廿日市市天神

### 明治天皇の巡幸

明治18年（1885）7月26日から明治天皇六大巡幸の最後となる山陽道巡幸が開始。明治天皇は北白川能久親王殿下、参議兼宮内卿伊藤博文侍従長、徳大寺実則等を従え、東京を出発され、海路山口県に向かわれた。7月31日に広島県厳島の大聖院に一泊された。翌8月1日に厳島を海路出発され、明治天皇上陸のための長さ四十二間・幅三間・高さ一丈と、長さ十二間・幅二間・高さ一丈の二箇所のの棧橋が築造された阿品のおあがり場に上陸された（現在「お上がり場公園」に西幸（さいこう）記念碑が建っている）。陸路広島に向かわれる途中、人力車で廿日市に入られ岩尾澤太郎邸でお休みになり、広島へ向かわれた。このとき、佐伯好郎少年が出仕された。明治天皇巡幸の際の遺蹟が残り、かつては地域で最も神聖な場所とされ、清掃と敬礼を欠かさなかったという。その後、昭和14年（1939）に招魂社が建立された。

※ 行在所（あんざいしょ）とは天皇が外出したときの仮の御所。



廿日市商工会女性会と廿日市市郷土文化研究会との桶ずし復元コラボにより再現

## 17 名物大新の桶ずし跡 廿日市市天神

『廿日市町大新桶ずしトイへバ古来廿日市名物ノ一ニテ味も非常に宜シカリキ、其起源ハ遠ク戦国時代ニアリ、戦争混雑ノ場合ナレバざらずしトテざらヲワザト使ヒ、桶ヲすしをけとナシツケルナリ。桶ノマヽ売レルヲ広島辺ヨリ極楽寺に参リシモノ土産トシテ数多買ヒ帰り居タリキ』  
『山陽道の宿場町廿日市の街道に面した大黒屋の店先は旅人たちの出入りで大変な繁昌ぶりでした。その頃の宿場町廿日市の名物に「桶ずし」がありました。「廿日市の桶ずし」「大新の桶ずし」と呼ばれ繁昌したものです。桶ずしとは、桶に押し寿司をつけたもので大黒屋のものは独特の風味を持っていたようです。廿日市の桶ずしは、文化11年(1814年)に大黒屋新助が考案、創業し、大黒屋の「大」と新助の「新」をとって大新の桶ずしと呼ばれるようになった

(廿日市町史 資料編 IV 896 頁より、廿日市商工会議所女性会 廿日市市の桶ずしの由来より引用)



## 18 正蓮寺 廿日市市天神 5-7

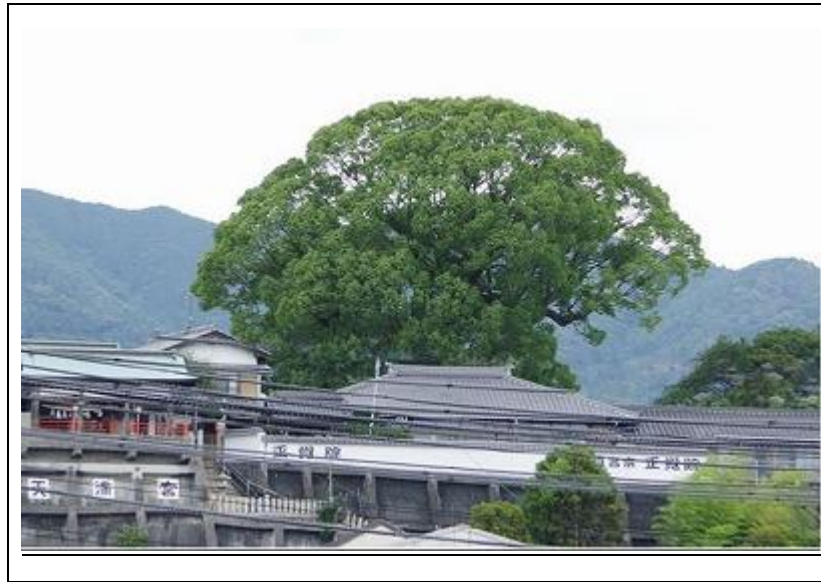
真言宗本願寺派 宗像山 慶長2年(1597) 僧安西開基 本尊 阿弥陀如来立像

僧安西は大和国奈良の人。俗名を宗像武蔵と云い、四十余歳のとき廿日市に来て真宗に帰依し一寺を建立した。

廿日市鑄物師(いもじ) 貞享5年(1688) 山田治右衛門貞栄作の梵鐘があったが、昭和17年太平洋戦争時供出された。

7年後の昭和24年に、住持宗像仏手柑は俳句の師高浜虚子の句入り梵鐘「結縁は疑も無き花盛 虚子」を鑄造した。

廿日市史跡建造物群へ[戻る](#)



## 19 正覚院 廿日市市天神 3-1

高野山真言宗 篠尾山 本尊 不動明王立像

正覚院は、真言宗 篠尾山(ささおやま)と号し、天平(てんぴょう)九年(737)行基菩薩開基と伝えられる。桜尾城主である巖島神主家藤原氏が天福元年(1233)鎌倉の荏柄(えがら)天神を篠尾山に勧請したことから天神坊と唱えられてきた。境内に廿日市市重要文化財で旅の守り神とされる十王像があり、廿日市宿に入った旅人はまず十王に今回の旅の安全を祈願し、再び西へ東へと次の宿へ急ぐのであったのであろうか。



## 20 天満宮 廿日市市天神 3-2

祭神 天満宮管公坐像

承久 3 年（1221）厳島神主を命ぜられた周防前司藤原親実が鎌倉から下向して桜尾城に入り、天福元年（1233）桜尾城主の厳島神主家藤原氏が藤原氏の氏神であった鎌倉の荏柄（えがら）天満宮を勧請したものと伝わる。天文 10 年（1541）友田興藤が桜尾城に火を放ち自決し、藤原神主家の滅亡後は新八幡・新宮を合祀して廿日市の氏神として祀られるようになった。

江戸時代は正覚院が天満宮を祀っていたので天神坊と呼ばれていたが、明治の神仏分離により、分離して祀られるようになった。

光明寺英子（<sup>えいし</sup>栄子）が京都に滞在していた寛延期（1748～51）に、廿日市の氏神である「天満宮」の神号を天皇家の一族である<sup>れいがんじそうしんのみや</sup>靈鑑寺宗真宮に染筆してもらい、これを譲り受けた。



## 21 廿日市本陣跡 廿日市市天神

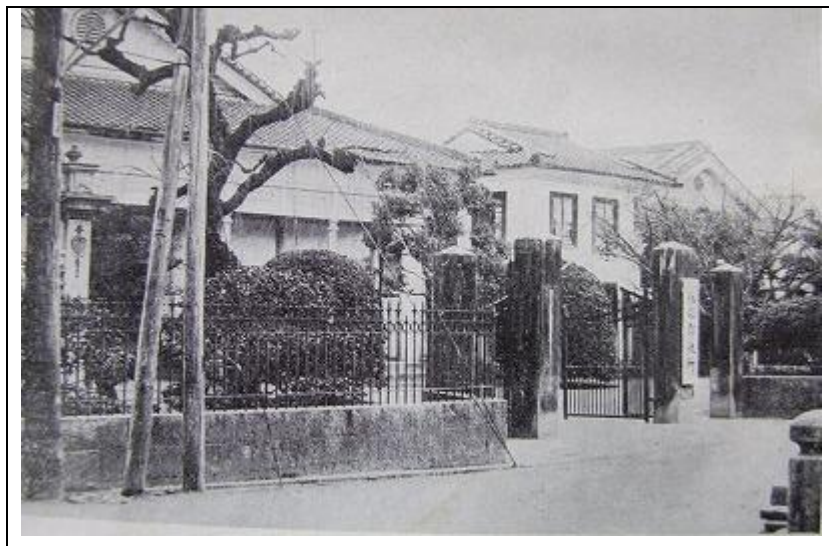
江戸幕府は全国の大名に参勤交代を命じた。西国街道は寛永10年（1633）の幕府巡見使の視察を機に整備された。廿日市宿駅が設けられ、大名や幕府役人などの宿泊や休憩にあてる施設として本陣も宿場町の中央に整備された。廿日市宿の本陣役は山田次右衛門が代々世襲して勤めた。本陣は現在の廿日市中央公民館の東側、南は海岸までと推定される18室を備えた広大な屋敷であった。

山田氏は厳島社造営の金具鑄造のため鎌倉より厳島社神主家藤原氏に随伴して廿日市に下向したと伝えられる。山田氏の鑄造活動は永享9年（1437）から天保15年（1844）の間約400年間余に及ぶ。

※ この写真は角地松山家の移転前のものである。現在は更地の上に新築民家が建つ。



(2016年中央市民センター建替え前)



## 22 佐伯郡役所跡 廿日市市天神 11-29

古代の安芸国にあった佐伯郡はもっと広く、現在の広島市安佐南区の大半と安佐北区の一部をも含んでいた。平安時代末期ごろに佐東郡（後の沼田郡）と佐西郡に分割され、江戸時代の1664年（寛文4年）に西側の佐西郡が再度佐伯郡に改称された。

明治11年（1878）佐伯郡役所は白壁の明治洋風建築として現中央市民センターの地に置かれた。郡内の教育振興、産業の振興を図ると共に、町村里道や港湾の改修等土木事業を行なった。大正12年（1923）郡制廃止後は大正15年佐伯郡役所は廃庁となった。その後、土木事務所・地方事務所等の県の出先機関として使用されたが、昭和46年（1972）公民館建設のためその姿を消した。

平成28年（2016）4月2日この地に再び新しく中央市民センターが誕生する。



## 23 蓮教寺 廿日市市天神 3-6

真宗本願寺派 慈恩山 永正 11 年(1514) 僧誓珍開基 本尊 阿弥陀如来立像

元は、佐伯郡高井村(広島市佐伯区五日市町大字高井?)にあって真言宗慈恩寺と称していたが、永正 3 年(1506) 2 月浄土宗に改宗。大永 7 年(1527) 光禅寺祐仙の次子常念が下平良に一寺を創建し蓮教寺と称した。のち空西のとき元和 3 年(1617) 廿日市天神に移った。

本堂前のソテツは津和野藩御船屋敷のお茶屋前にあったものが移植された。享和元年(1801) 12 月広島妙蓮寺弟子大龍(だいらゅう)が第十世住職となる。寛政 9 年(1797) から文化 3 年(1806)にかけて浄土真宗本願寺派に起こった「三業惑乱(さんごうわくらん)」つまり三業帰命説(さんごうきみょうせつ)の成否をめぐる論争で新義派の智洞の説を批判する古義派を代表して文化元年江戸で大瀛(だいえい)は智洞と対決したが同年 5 月 4 日没した。大龍は大瀛の弟子として三業帰命説の排斥に努めた。幕府寺社奉行の裁断で三業帰命説は不正義という形で一応の解決をみる。





## 24 常国寺 廿日市市 2 丁目 4 番 12 号

日蓮宗 長栄山 永正 12 年(1515) 僧日政開基 本尊 日蓮上人坐像

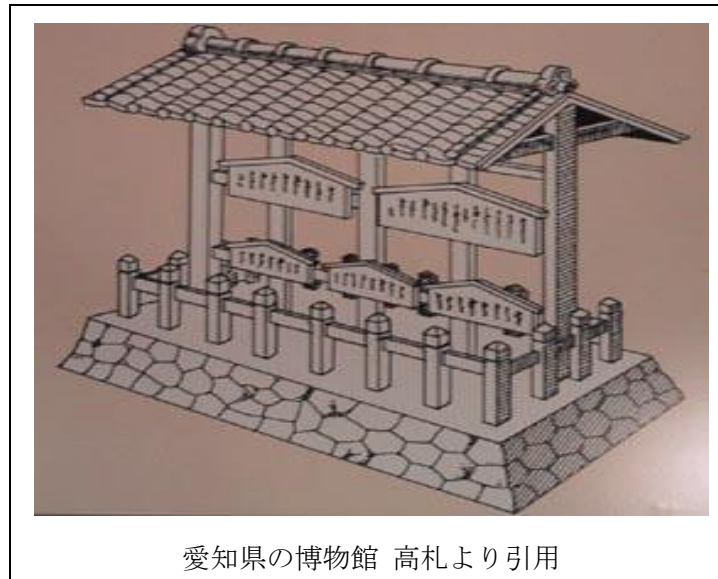
山門前に日蓮宗宝塔がある。慶安元年（1648）建立のお題目碑で高さ 260cm もある近在では大型である。



## 25 光明寺 廿日市市 2 丁目 4 番 18 号

真宗本願寺派 護念山 天文 15 年(1546) 僧鎮光坊円尊開基 本尊 阿弥陀如来立像

僧円尊は毛利元就の四男穂井田元清（ほいだ もときよ）の家臣渡辺与右衛門慰清正という。嫡子の早世に悲嘆し剃髪。渡辺英子（えいし）ゆかりの地である。境内の墓苑に、この地方で最初に行われた人体解剖の碑がある。



## 26 高札場跡

廿日市市 1 丁目

### ■高札とは

高札とは制札ともいい、「こうさつ」とも「たかふだ」とも読む。徳川幕府が農民や商人を取り締まる基本的なきまりを公示したものの。

### ■高札の構成

文面は表題、本文、年月日、発行主体で構成されている。表題は「定」と「覚」と2種類のものがある。

「定」は永年掲示、「覚」は暫定的な掲示とされる。

発行主体は主に「奉行」と「太政官」がある。

### ■高札場

高札は道が交差した人の往来の多いところに、人に目立つように一段高くした「高札場」に掲示された。

(愛知県の博物館 高札より引用)

画像なし

## 27 西念寺跡(胡蝶園) 廿日市市廿日市1丁目

廿日市では、商業活動とともに町人の文芸・芸能活動が盛んであった。

享保年間（1716～35）、芭蕉門下の志<sup>しだ</sup>田<sup>や</sup>野<sup>ぼ</sup>坡（江戸時代中期の俳人）が西念寺跡に胡蝶園を開き、門弟の指導に当たり、この地方の俳諧活動の拠点となった。

元文4年（1739）の「伊都岐島八景中」に、光明寺七世坊守渡辺英子（わたなべえいし）の歌が納められている。彼女は上京の時鳥丸大納言へ出入りが認められ、寛延3年（1750）正月、宮中の歌会で詠んだ褒美として、<sup>れい</sup>鑑<sup>が</sup>寺<sup>ん</sup>宗<sup>じ</sup>真<sup>そう</sup>宮<sup>しんのみや</sup>から「天満宮」の御染筆を賜った。天満宮の石鳥居の扁額「天満宮」にはレプリカが掲げられている。



## 28 常念寺 廿日市市1丁目5番19号

真宗本願寺派 宝州山 永正11年(1514) 僧誓珍開基 本尊 阿弥陀如来立像

特筆すべきは、「堅田(かたた)源右衛門の首」伝説の堅田(かたた)源右衛門の像がある。

文明十二年(1480)山科に念願の本願寺御影堂が完成する。門徒衆は三井寺に親鸞聖人の御像の返還を求めると三井寺はそれは出来ぬ、信徒衆の首を二つ持ってくれば返してやると無理難題を持ち出してきた。これを伝え聞いた蓮如上人は、困惑され日夜心痛なされていた。当時光徳寺の門徒衆に篤信の源右衛門・源兵衛という漁夫の父子がいた。この難題に源右衛門・源兵衛親子は、日ごろのご恩に報いたいと、首を差し出す決意をした。こうして堅田の源右衛門は息子の源兵衛の首を持参し、もう一つは自分の命を差し出すからと返還を懇願する。三井寺は堅田の源右衛門・源兵衛親子の殉教心に感じ入り、御真影と源兵衛の首を返してくれた。その後父源右衛門は、諸国巡礼の旅の末、備後国(広島県)で没したと伝えられている。なぜ廿日市の地に、堅田(かたた)源右衛門の像が伝承されているのか、当寺でも不詳である。



## 29 潮音寺 廿日市市須賀9番31号

浄土宗 松風山 永禄9年(1566) 僧金川龍天開基 本尊 阿弥陀如来立像(三尊来迎仏)

境内に巖島光明院開基 以八上人の墓がある。奈良の當麻寺(たいまでら)と同じ構図のもつ浄土曼荼羅(絹本縦187cm,横177cm)が秘蔵されている。幕末の慶応3年秋、武力討幕準備の進展とともに、広島藩で編成された土庶混成軍「応変隊」が結成された処である。

- ・ 隊士は奉行・神尾尚太郎以下220人。応変時は鳥羽・伏見の八幡山攻撃に120名、日光口より会津攻撃には231名が参加した。
- ・ 奉行・神尾尚太郎 大川左源太 日高砂蔵 松浦熊雄 川本久次郎 石井三蔵 沖条六 菅野徳之助 小笠原怒左衛門 山本他人輔 神原朝之進 古清水初次郎 中村豊助 西山吉平 山県林蔵 石川佐太郎 住田甚吉 福永宗平 大村豊次郎 佐久間善太郎 田部内蔵之進 渡辺他人丞 庄七 鉄七 兼次郎 喜兵衛 新蔵 太兵衛 彦輔 清左衛門 善八 増蔵 徳兵衛 市蔵 岩吉 熊五郎 四郎七 甚吉 長吉 広吉 清蔵 吉蔵 その他。
- ・ 明治5年2月15日解散。 (参考) 戊辰戦争 日光口従軍隊其二 応変隊 「芸藩志 129巻」 東広島市立中央図書館蔵



### 30 住吉神社

廿日市市住吉1丁目

住吉三神 底筒男命（そこづつのおのみこと）・中筒男命（なかづつのおのみこと）・表筒男命（うわづつのおのみこと）

往時潮音寺の境内社であった住吉の神は海上安全守護神として住吉新開の埋立に伴い三度遷座された。

住吉三神 とは底筒男命（そこづつのおのみこと）・中筒男命（なかづつのおのみこと）・表筒男命（うわづつのおのみこと）。

昭和五十八年昭北新開県道拡幅の時に、天満宮に向いていたのを海に向け替えられた。

境内には赤花崗岩に芭蕉葉に初冬の湊の賑わいを詠んだ句が彫られた句碑がある。芭蕉作と伝えられきたが、古典俳文学大系 芭蕉発句誤伝の部 元禄十年真木柱の句集より、北村湖春（こしゅん）の作とされる。芭蕉は湖春の父北村季吟（きぎん）の弟子であった。「によきによきと 帆はしら寒き入江かな」。

廿日市史跡建造物群へ[戻る](#)

画像なし

## 31 口屋番所跡 廿日市市河愛

御口屋・材木町

廿日市は佐伯郡山間部からの林産物の集積地となり、近世以前から材木商人が多く集まって東・西材木町が成立した。

また、町の西入口には口屋、東材木町浜寄りに十分一所じゅうぶんいっしょの番所を置いて林産物の運上銀を徴収していた。



廿日市史跡建造物群へ[戻る](#)

画像なし

## 32 西の火番所跡 廿日市市須賀

江戸時代にあり。

廿日市史跡建造物群へ[戻る](#)



### 33 福佐売神社

廿日市市廿日市市可愛

西国街道町屋通り終端の可愛川の手前の右に参道あり、その奥まった突き当りに鎮座。

「三代実録」に貞観14年（872）12月26日の条に、この土地の人安芸国佐伯郡 榎本連福佐売（えのもとのむらじふくさめ）を賞し位階を与え、戸内の祖を免除し、その貞節を村の入り口の門のかどに表彰したとの記録が見える。

江戸後期まで福島社(福島明神)と呼ばれていた。江戸後期に福島社の地が榎本連福佐売の所居の地であるとされてから、福佐売神社と呼ばれるようになったようである。

# 歴史が眠る芸州廿日市史跡建造物群 およその位置情報

[廿日市史跡建造物群へ戻る](#)

1~7



# 歴史が眠る芸州廿日市史跡建造物群 およその位置情報

[廿日市史跡建造物群へ戻る](#)

## 8~20



# 歴史が眠る芸州廿日市史跡建造物群 およその位置情報

[廿日市史跡建造物群へ戻る](#)

21～28



# 歴史が眠る芸州廿日市史跡建造物群 およその位置情報

[廿日市史跡建造物群へ戻る](#)

## 29～30



# 歴史が眠る芸州廿日市史跡建造物群 およその位置情報

廿日市史跡建造物群へ[戻る](#)

## 31～33

